

## モンゴル帝国西部継承諸政権における王統と権威

赤坂恒明

中央ユーラシア歴史文化研究所「モンゴル帝国継承国家論の再検討」第1回研究会  
2012年1月28日 於早稲田大学文学学術院第5会議室

### 序

1206年にモンゴル帝国を建国したチンギス・ハンは、九十五の千戸を基礎単位としてモンゴル高原の遊牧民を再編成し、諸千戸のうちの一部を自身の諸子弟に分配した。杉山正明氏の説によると、年長の三子息ジュチ、チャガタイ、オゴデイは、それぞれ四つの千戸が与えられ、モンゴル高原の西方、アルタイ山脈の西麓を遊牧地とした。二弟カサル、三弟カチウンの子アルチダイ、末弟テムゲ=オッチギン（および同居の母ホエルン）には、それぞれ、一つ、三つ、八つの千戸が与えられ、モンゴル帝国の東方、大興安嶺周辺が彼らの遊牧地となった。チンギス・ハン自身は、モンゴル高原の中央部に自身の諸千戸を保有したが、これらは、彼の死後、末子相続の伝統により、嫡出の末子トルイが相続することとなった。なお、異母弟ベルグテイは、当初、千戸長の一人として処遇され、庶子ゴレゲンは、後に四千戸が与えられ、右翼の一部を構成した。

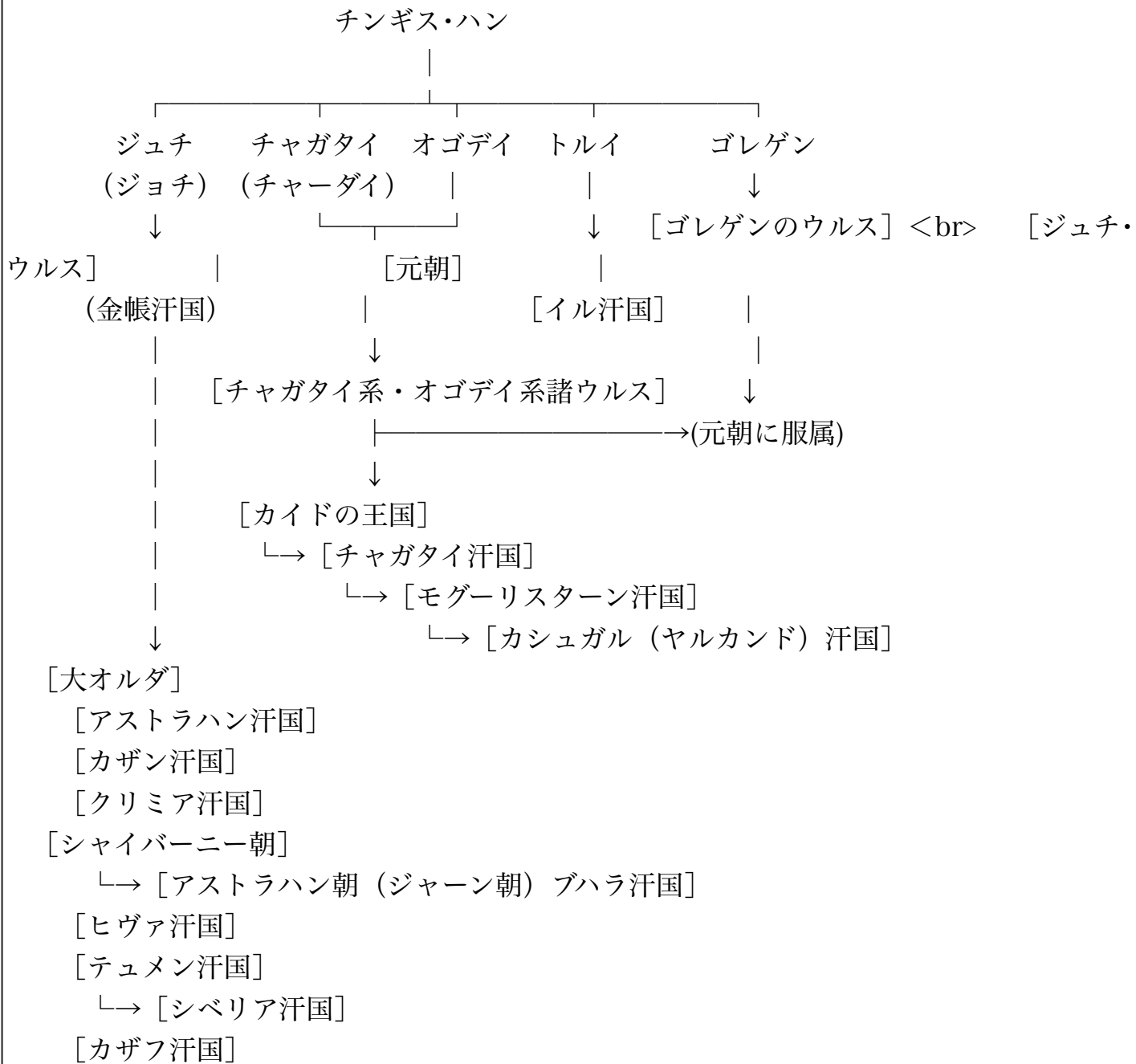
なお、モンゴル帝国草創期における諸子弟への千戸の分民については、現在、日本では、ラシードディーンの『集史』の記載に基づいた杉山正明氏の説（杉山正明「モンゴル帝国の原像——チンギス・カンの一族分封をめぐる——」『東洋史研究』第三十七巻第一號、1978.6, pp.1-34. 再録：杉山正明『モンゴル帝国と大元ウルス』, 京都大学学術出版会, 2004.2, pp.28-61, 「モンゴル帝国の原像——チンギス・カン王国の出現」）が定説化している。しかし、『元朝秘史』には、『集史』とは異なる記載がある。なぜ、『元朝秘史』において、『集史』と異なる記載があるのか、十分な説明はなされていないように思われる。

それはともかく、モンゴル帝国の変容の過程において、これらの諸ウルスは、それぞれ部分的な再編成を経て、一部は元朝の支配下に入り、一部は独立の政権として自立した。即ち、モンゴル帝国の西北部に位置するジュチ・ウルス（所謂「金帳汗国」「キプチャク汗国」。後述）、中央部に位置する「チャガタイ汗国」（オゴデイ裔のカイドの政権を継承）である。また、チンギス・ハンの四男トルイの嫡出の三男フレグによって建てられた「イル汗国」（フレグ・ウルス）は、モンゴル帝国の南西部を支配した。これら西部の三政権は、モンゴル帝国の所謂「三汗国」として有名である。

モンゴル帝国の崩壊後も、チンギス・ハンの長男ジュチ、次男チャガタイ、三男オゴデイのそれぞれの後裔は、ユーラシア西部において歴史上の活動を行った。しかし、フレグの子孫は、イル汗国の分裂後、間もなく歴史上から跡を絶った。

本報告では、ユーラシア西部において、これらチンギス裔が君主となっていた政権を中心とする、モンゴル帝国西部継承諸政権における王統とチンギス裔の権威について、今後の研究課題と成り得ると思われる諸問題を例示し、以て、研究の導論・展望の一部とすることを試みたい。

現在の通説に主拠したチンギス系諸政権



一 モンゴル王統系譜の研究の現況<br> チンギス・ハン一族の系譜を確定する作業は、長年にわたり、多くの研究者によって積み重ねられているが、モンゴル帝国期におけるモンゴル帝国西部の諸王家については、ラシードッディーンの『集史』 *rašīd al-dīn, jāmi' al-tawārīx*、『五族譜』 *šū'ab-i panjgāna*、チムール朝期の『ムイッズル=アンサーブ』 *mu'izz al-'ansāb fī šajarat salātīn muyūl*の三史料が基本史料となる。

しかし、既に多くの研究において用いられているこれらの諸史料についても、未使用または十分に使用されていない諸写本があるなど、研究課題が残されている。

『集史』については、タシケント本に所収の図示化された系図が、研究上、広く使用するこ

とができる状況になっていない（報告者も未見）。

アラビア語版『集史』（MS., İstanbul, Aya Sofya, 3034.）は、写本における本文証跡は良好な状態ではなく、研究においても部分的な使用にとどまっているが、ペルシア語本文を校訂することが可能であるのみならず、同時代的な独自の増補記事も部分的に見られるので、積極的な使用が望まれる。

『五族譜』については、ここ最近、中国で本格的な研究が始まった模様であるが、現時点では具体的な成果は公表されていないようである。

『ムイッズル=アンサーブ』パリ写本（MS., Paris, Bibliothèque Nationale, Ancien fonds persan 67）は、近年、カザフスタンで影印付きの訳注（*История Казахстана в персидских источниках*, III том. *Му'изз ал-ансаб. (Прославляющее генеалогии)*. Введение, перевод с персидского языка, примечания, подготовка, факсимиле к изданию Ш.Х.Вохидова. Алматы, Издательство“Дайк-Пресс”, 2006）が刊行され、使用が格段に容易になったが、本写本は、質的に良い写本であるにもかかわらず、部分的に誤写があるので、『ムイッズル=アンサーブ』インド系諸本によって校訂を行う必要がある。

また、シャイバーニー朝初期のチャガタイ=テュルク語史料『勝利の書なる選ばれたる諸史』*tawārīx-i guzīda[-i] nusrat nāma* は、既にジュチ裔の系譜の部分については、報告者による校訂テキストと日本語訳があるが、それ以外の部分については、まだ校訂が行われていない。本史料には、チャガタイ裔の系譜に、『ムイッズル=アンサーブ』の系譜情報を補正する記載があり、それに従って、報告者は、チャガタイの末子バイダルの後裔の系譜を復元した。また、チャガタイの孫ブリの子、アジギの子孫に関する系譜情報に、注目に値する記載がある。

所謂「ウズベク史料」には、ジュチ裔を中心とするチンギス裔の系譜情報を伝える重要な史料がいくつかあるが、それらのうち、ジャーン朝（アストラハン朝）ブハラ汗国期のペルシア語史料、マフムード・イブン・ワリーの『神秘の海』（*mahmūd ibn amīr walī, bahr al-'asrār fi manāqib al-'axyār*）には、『勝利の書なる選ばれたる諸史』のジュチ裔系譜に基づき、さらにそれを増補した系譜情報があり、『勝利の書なる選ばれたる諸史』の本文を復元するのに有益であるのみならず、独自の系譜情報も貴重である。しかし、本史料には刊本がなく、利用が困難な状況にある。

ヒヴァ汗国のチャガタイ=テュルク語史料、アブル=ガズイーの『テュルク系譜』（*abū al-ḡāzī bahādur xān, šajara-i turk*）は、ヒヴァ汗国の王族たちに関するまとまった系譜情報を伝えるが、現在なお、デメゾンの刊本（P.I.Desmaisons, *Histoire des Mongols et des Tatares par Aboul-Ghazi Behadour Khan*, St.Petersbourg, 1871, 1874; (repr.)Amsterdam, 1970）が使用されており、新しい校訂本の出現が待たれる。

ムーニスとアーガヒーの『幸福の花園』（*mūnis, āgahī, firdaws al-'iqbāl*）は、アブル=ガズイーの系譜情報に基づきつつも、彼より後のヒヴァ汗国に関する基本的な情報を伝えているが、ブレゲルの信頼できる校訂本と英訳注が出て、利用が容易になった（Shir Muhammad Mirab Munis and Muhammad Rida Mirab Agahi, *Firdaws al-Iqbal, History of Khorezm*. edited by Yuri Bregel. Leiden, 1988; Shir Muhammad Mirab Munis and Muhammad Riza Mirab Agahi, *Firdaws al-iqbal : history of Khorezm*. translated from Chaghatay and Annotated by Yuri Bregel. Leiden, 1999）。

所謂「モグーリスターン汗国」のチャガタイ裔については、ムハンマド=ハイダル・ドグラト

の『ラシード史（ターリーヒ・ラシーディー）』（muhammad haydar, *tārīx-i rašīdī*）が重要であるが、モグーリスタン汗国初期の系譜情報については問題が少なからず、前記の『ムイッズル=アンサーブ』諸本と『勝利の書なる選ばれたる諸史』の系譜情報と比較・検討する必要がある。いずれにせよ、校訂本の刊行が待たれる。

「カシュガル（ヤルカンド）汗国」については、シャー=マフムード・チュラーズの『年代記』（Шах-Махмуд ибн мирза фазил Чурас, *Хроника. Критический текст, перевод, комментарии, исследование и указатели* О.Ф.Акимовской. Москва, Главная редакция восточной литературы издательства 《Наука》, 1976）を利用することができる。

また、カザフ王族については、多くの系譜関係史料と研究が、近年、刊行されているが、本報告では割愛したい。

## 二 旧イル汗国領内におけるモンゴル王族の末裔

イル汗国の継承政権をめぐる諸問題については、ここでは取り上げない。

但し、イル汗国の滅亡後もイラン地域に残存した、モンゴル王族の存在についてのみ、指摘しておきたい。

イル汗国の分裂後、有力諸勢力によって、フレグの諸子孫が擁立されたが、モンゴル王族のなかで、最後まで地方権力を保ったのが、チンギス・ハンの弟、カサルの子孫にあたるトガ=テムルであった。そのため、彼を最後のイル汗と位置づける説もある。

このトガ=テムルの子孫は、チムール朝期のペルシア語によるモンゴル王統系図である『ムイッズル=アンサーブ』においても記載があるが、この家系は、イラン西北部の地方有力者として、チムール朝期に至るまで、歴史上の存在が確認されている。

ナタンズィー『ムイーン史選』より（仮訳）

(*Extraits du Muntakhab al-Tavarikh-i Mu'ini (Anonyme d'Iskandar)*. Jean Aubin (ed.), Teheran, 1957, pp.159-160)

トガ=テムル・ハンの子ルクマーン・パーディシャー luqmān pādīshāh bn tuyā tīmūr xān  
の即位の言及

[ルクマーン・パーディシャー]

[ルクマーンは]、父（トガ=テムル）の[死]後、アミール・ワリー amīr walī の援助で、アスタラーバード astarābād にて王座に即いた。しかし、まだ、サルバダール sarbadāl の暴動が鎮まっていなかった。結局、性悪の者たち (bad-nafsān) から[成る]連中が、ワリー walī を説得した。即ち、「彼（ルクマーン）を捕えるように」と。ルクマーン・パーディシャー luqmān pādīshāh は、丁度良い時に (bi-waqt) 落ちた。そして、逃亡の手綱を、マー・ワラー・アンナフル mā warā' al-nahr の方向に注意を向けた。そして、世界の保護者 ('ālam panāh) スルターン=ガーズィー陛下 (hadrat-i sultān yāzī, =チムール) の宮廷 (dar-gāh) に避難した。その境域 (hudūd) にて郷里から離れて暮らし[てい]たところの数年後、ついに、スルターン=ガーズィー陛下 (hadrat-i sultān

γāzī) の恩恵の至福によって、マーザンダラーン māzandarān がワリー walī の手から解放されたことの後、スルターン=ガーズィー陛下 (hadrat-i sultān γāzī) は、彼の陛下 (ルクマーン) を、アスタラーバード astarābād にて即位させた。そして、長い時間まで、ハーキム位 (hukūmat) のなかに過ごした。

[ピーラク・パーディシャー]

[ルクマーンが]自然死で亡くなったことの後、スルターン=ガーズィー陛下 (hadrat-i sultān γāzī, =チムール) は、彼の子息ピーラク・パーディシャー pīrak pādīšāh を、彼の父の地位に即けた。そして、州 (wilāyat) のハーキム (hākim) にした。そして、長い期間、彼の占有下にあった。

しかし、スルターン=ガーズィー陛下 (hadrat-i sultān γāzī) が神 (haqq) の保護に加わった (=亡くなった) ことの後、彼には世界支配者たること (jahān-gīrī) の願望が、頭の中に起きた。かくて、アミールザーダ (amīr-zāda) ミーラーン=シャー mīrān-šāh の、ホラーサーン xurāsān の方向への注意の時に、サウリン sāwrīn (贈り物) によって、ただ単に注意をも払わなかった。そして、通過の時に、軍隊 (laškar) [を]道の上に率いてきた。そして、戦争もした。

もう二回目に、サルバダール sarbadāl の反逆者たちと一致して、アミールザーダ (amīr-zāda) シャールフ shā[h] rux の軍隊 (laškar) と戦争した。そして、敗北した。ホラーサーン xurāsān 出身のシャイフ=アリー=バハドルの子サイイド=ホージャ sayyid xwāja bn šayx ‘alī bahādur が反乱したことの後、[ピーラクは]、落胆の後、彼 (サイイド=ホージャ) [のもと]に避難した。アミールザーダ (amīr-zāda) シャールフ shā[h] rux が大軍と共に 【p.160】 続けて到着したとき / ので、[ピーラクは]アスタラーバード astarābād の外 (zāhir) にて会戦した。

そして、[ピーラクは]次のように崩壊した (az ham bi-rāxt) 。即ち、そのことの後、[ピーラクは]完全に、意図から存在が落ちた。そして、ホラズム xwārazm に行った。そして、アミールザーダ・ミーラーン=シャーの子オマル ‘umar bn amīr-zāda mīrān-šāh がアスタラーバード astarābād から軍隊[を]ホラーサーン xurāsān に率いていき、そして、[ピーラクが]敗れた後、彼 (ピーラク) は、ホラズム xwārazm に来た。そして、再び、アスタラーバード astarābād を支配した。[しかし]、[ピーラクは]、ひとつの力 [も]持つ[てい]なかったのので、ホラーサーン xurāsān の軍隊 (laškar) [が来る]や否や (bi-mujarrad) 、逃亡に逃亡[を重ねることを]選んだ。そして、まさにその失望の中に沈んだ。

今日、彼の子息が、シルヴァーンの地 (širwānāt) に存在している。

チンギス・ハンの弟の子孫であるこのトガ=テムル裔のもとでチンギス・ハンの権威があったか否かを確認するのは困難であるが、チムール死後の混乱に乗じて、チムール朝に取って替わろうとした所に、イル汗国の復興の意図が無かったとは考え難い。トガ=テムル裔の勢力は、イラン北西部の一地方政権にとどまる存在ではあるが、このような意味で、モンゴル学の立場から

見れば、十分に検討するに値する課題の一つとはなるであろう。

### 三 ジュチ裔諸政権

ジュチの後裔は、キプチャク草原とその周辺の諸地域を支配した。同時代史料では「キプチャク草原 *dašt-i qibjāq*」と地名を以て呼ばれる、所謂「ジュチ・ウルス улус Джучи」である。

一九八〇年代以降、日本では、「ジュチ」を「ジョチ」に置き換えた「ジョチ・ウルス」という用語が多用されているが、この“学術”用語は、ペルシア語の同時代史料に見える「ジュチ・ウルス *ulūs-i jūjī*」とは概念上、異なるものであるので、注意が必要である。

さて、モンゴル帝国時代のジュチ・ウルスは、欧米のを中心とする少なからぬ研究者たちによって「金帳汗国」または「キプチャク汗国」と称される。

通説的な歴史叙述に従うと、この「金帳汗国」の分裂後、キプチャク草原の西部とその周縁地域には、「金帳汗国」の正統政権として位置付けられる「大オルダ」（大帳）、ヴォルガ川中流域の「カザン汗国」、カザンから逃れてモスクワ大公に従属した王族の封領に始まる「カシモフ汗国（皇国）」、ヴォルガ川下流域の「アストラハン汗国」、クリミア半島および現在のウクライナ南部を中心とする草原地帯における「クリム（クリミア）汗国」が成立した。一部の研究者によって「後期金帳汗国」とも称されるこれらの諸政権は、「モンゴル=タタール人」が支配する「金帳汗国」の後継政権として位置づけられ、今日のロシアのタタール民族の歴史に関係があると見做されている。

一方、キプチャク草原の東部においては、通説的な歴史叙述では、「ウズベク」と称される新しいテュルク系遊牧民集団が形成され、1446年、ジュチの五男シバンの子孫にあたるアブル=ハイル・ハンによって統一された。しかし、1456年、アブル=ハイルは、東方から侵入した西モンゴル系のオイラトと戦って敗れ、遊牧君主としての求心力が低下した。そのような状況のもと、ジュチの十三男トカ=テムルの子孫である二人の王子、ケレイとジャーニーベクが、アブル=ハイルの政権から離脱した。通説的な歴史叙述では、この事件は、「アブル=ハイル・ハンのもとで国家形成を遂げたウズベク族からカザフ族が分離・独立した」と称されることがある。それはさておき、アブル=ハイルの没後、彼の政権は瓦解し、キプチャク草原の東部とその周縁地域においては、南西シベリアの「テュメン（チュメニ）汗国」——「シビル（シベリア）汗国」は、その系統に属する——、西トルキスタン南部の「シャイバーニー朝」、ホラズム地方を中心とする「ヒヴァ汗国」、トルキスタン北部の草原地帯を中心とする「カザフ汗国」が分立した。これらの諸政権は、いずれもジュチの後裔を君主として戴いており、その点では、キプチャク草原西部のジュチ裔諸政権と変わらない。しかし、通説的な歴史叙述に従うと、「シャイバーニー朝」と「ヒヴァ汗国」は、「ウズベク人」の政権であり、「カザフ汗国」は、「ウズベク人」から分離して成立した「カザフ人」の政権であるとされ、いずれも、「モンゴル=タタール人」とは異なる“民族”の政権として位置づけられ、所謂「金朝汗国史」の文脈の中では語られないことが多い。

既に報告者は、このような通説的な歴史叙述が、ヨーロッパ（ロシア）中心の歴史観に基づいて構成されたものであり、これを、中央アジア・西アジアの諸史料によって相対化することを試みた。即ち、これら、ジュチの後裔が支配した諸政権を「ジュチ裔諸政権」と総称し、そ

の歴史を再構成することに努め、その成果と展望を拙著『ジュチ裔諸政権史の研究』（赤坂恒明 2005）において述べた。

また、拙稿「ジュチ・ウルス史研究の展望と課題より」（赤坂恒明 2005）において、ユーラシア西部のジュチ裔における、チンギス・ハンの血統の権威の継承に関する諸問題、即ち、(1) クリム汗国の宗主国たるオスマン朝において、オスマン家が断絶した場合、帝位をクリム汗家が継承するという説、(2) 西北カフカスのチェルケス諸集団とノガイ人の社会におけるジュチ裔の存在、(3) カフカス山岳民の封建領主層の一部がジュチ裔を称する系譜伝承を持っていること、(4) シビル汗クチュムの子孫が、ノガイ・バシキールのみならず、チベット仏教徒であるトルゴートとも、密接な関係を持っていたこと、を紹介した。

上記の諸点については、当該論著とそこに引用された諸文献を参照されたい。

#### 四 チャガタイ裔とオゴデイ裔

モンゴル帝国期、チャガタイ裔とオゴデイ裔は、互いに密接な関係を持っていた。第四代皇帝モンケ・ハーンの死後に生じたモンゴル帝国内の混乱において、チャガタイ裔とオゴデイ裔のそれぞれ一部は、元朝に服属したが、多くは、オゴデイの孫カイドを盟主とした、中央アジアにおける「カイドの王国」に加わった。カイドの死（1301年）後、「カイドの王国」は、カイドに服属していたチャガタイ家当主ドワによって継承されることとなった（1306年）。これが「チャガタイ汗国」である。

「チャガタイ汗国」では、チャガタイ家、オゴデイ家の王族たちが分立する傾向が強く、また、ドワの子孫も、モンゴル系の部将たちによって各地に擁立され、早くも十三世紀の前半には分裂状態に陥った。通説的な歴史叙述によると、「チャガタイ汗国」は、十四世紀前半に、遊牧民の伝統を重視する「モグール人」（他称ジェテ）の東チャガタイ汗国と、イスラーム教に入信して定住化した「チャガタイ人」（他称カラウナス）の西チャガタイ汗国とに分裂した、と述べられることが少なくない。しかし、これは適切ではない。イスラーム化が定住化と重なるわけではなく、そもそも、トグルク=テムル・ハンによる「東チャガタイ汗国（モグーリスタン汗国）」の建国自体が1347/8年のことであり、トグルク=テムル自身もムスリムであった。それはともかく、チャガタイ汗国の分裂状態は、十四世紀の中葉に至り、天山北麓の草原地帯を根拠地とした東部の「モグーリスタン汗国」と、マーワラーアンナフルを本拠地とした西部のチムール（ティムール）帝国へと収斂されたのであった。

#### チムール朝下のチンギス裔

モンゴル系バルラス氏出身のチムール（アミール・テムル）は、チャガタイ汗国の分裂後、長らく混乱が続いていた西トルキスタン南部の政治的統一を成し遂げ、1370年6/7月、サマルカンド近傍でクリルタイを開催し、ティムール帝国またはティムール朝（前者をティムール自身の、後者をティムールの子孫たちの国家と区別することもある）が成立した。しかし、これは、チムール自身ではなく、オゴデイ裔のソユルガトミシュの即位であった。この時点において、チムールはまだ絶対的権力を握ってはおらず、チンギス家の男系血統を重んずるチャガタイ人（テュルク化・イスラーム化した旧チャガタイ汗国西部のモンゴル系遊牧民）たちの支持

を得るため、チンギス裔を名目上の汗に擁立したのである。そして、自らは、チンギス家の女性を娶り、チンギス家の女婿（キュレゲン）である部将（アミール）としての立場に甘んじ、「アミール・テムル・キュレゲン」、「アミール・サーヒブ=キラーン」と呼ばれた。従って、チムールや彼の子たちによって発された命令（ヤルリク）は、形式上、名目汗によって発令されたものとされた。また、チムールによる対外遠征も、西アジア遠征は、チンギス裔がいなくなった旧イル汗国領内にチンギス家の汗が進軍したものであり、キプチャク遠征は、ジュチ裔のトクタミシュをオゴデイ裔の汗が討つという建前のもとに行われたものと考えられる。

ソユルガトミシュの死後、その子スルターン・マフムード（在位1388～1403年）が汗位を継承したが、チムールの権力が絶対化するとチンギス家の汗の権威は、対外的、対内的、共に不要となり、マフムードの死後、汗は立てられなかった。

なお、チムール宮廷には、「オグラン」という称号を帯びたチンギス裔の王子たちが高い序列のもとに仕えていることが知られている。この問題については、チムール宮廷を描いたミニアチュールを分析した安藤志朗「ティムール朝國制—— Diez A. Fol.74 未完成ミニアチュールより——」（『東方學』第八十七輯、1994, pp.1-17）があるが、包括的に論じたものとしては、杉山隆一氏による口頭発表、「ティムール朝の支配におけるモンゴルの伝統の再検討—オグランたちの活動を中心に—」（2003年9月27日、イスラム国家論 2003年9月例会、於東京大学）があり、注目に値する考察・見解が述べられたが、現在に至るまで文章化されていない。

一旦廃された傀儡汗は、チムールの死後、復活した。チムールは、生前、自身の長男ジャハーンギール、次いでその長男ムハンマドを後継者としていたが、いずれも早世した。そのため彼は遺言で、ジャハーンギールの次男ピール=ムハンマドを継承者として指名した。ところが、チムールの三男ミーラーン=シャーの子ハリール・スルターンが、祖父の遺言を無視し、実力で後継者の地位を奪取した。その際、彼は、チムールの嫡孫ムハンマドの長男ムハンマド=ジャハーンギールを汗に立てた。ここに非チンギス裔の汗が現れた。これは、篡奪者たるハリールが自己の正統性を主張するために、対立者たちよりも血統において優ると考えられた、チムールの嫡曾孫を擁立したものであろう。

ハリールに代わってチムール朝の第三代君主となったシャルフは、現在のアフガニスタン北西部のヘラートに居住し、自身の長男ウルグベクをサマルカンド太守とした。ウルグベク統治下のサマルカンドには、再びチンギス家出身の汗が置かれた。これは、キプチャク草原におけるジュチの子孫の勢力が復興し、チムール朝を脅かしていたことと関係があろう。なお、ウルグベク期の傀儡汗たちは、「汗の囲い」と呼ばれる一室に軟禁状態に置かれていたと言われ、モグーリスタン王家の出身であるサトク・ハンの他は、名前さえも知られていない。

シャルフとウルグベクが相次いで没した後、チムール朝は分裂し、混乱に陥った。結局、チムール家の王子たちによって、サマルカンドとヘラートに二つの政権が成立したが、いずれにおいてもチンギス裔の汗は立てられなかった。これは、両政権とも、都市を中心とした、定住民地帯を基盤とする、比較的規模が小さい政権に過ぎず、政権内において、チンギス家の男系血統を重んずる遊牧民集団の要素が少なかったこと、また、チンギス裔の権威に代わって、イスラーム神秘主義教団の影響のもとでムハンマド裔（サイイド、シャリーフ）の権威が相対的に高くなっていたことと、関係があると思われる。



チムール朝の傀儡汗については、チムール朝初期のを対象とした川口琢司「テムル家とチンギス家」（『西南アジア研究』第四五号、1996.9, pp.1-26）があるが、まだ解明すべき問題が残されており、さらなる検討が行われることが期待される。

さて、サマルカンドとヘラートにおけるチムール朝の両政権は、相次いで、ジュチ裔のムハンマド・シャイバーニー・ハンによって滅ぼされた。サマルカンド政権の君主であったバーブルがインド方面に転進し、ムガル（モゴール）朝を建てたことは、周知の事実であろう。ムガル朝のもとには、中央アジア方面（ウズベク、モグーリスターン）から、何人ものチンギス裔の王子たちが移住したことが確認されるが、管見の限りでは、これら、インドに移ったチンギス裔については研究がなく、彼らの実態については殆ど全く知られていない。

### モグーリスターン汗国のチンギス裔

モンゴル系ドグラト氏のアミール・プラジによってチャガタイ裔のトグルク=テムルが擁立されて成立した「モグーリスターン汗国」（「東チャガタイ汗国」）は、一時、チャガタイ汗国の再統一を成し遂げたが、トグルク=テムルの没（1362/3年）後まもなく、ドグラト氏のアミール・カマルッディーンがチャガタイ家の汗を廃した（1365～1389年）。

この時期、モグーリスターンは、複数回にわたりチムールによる攻撃を被っている。オゴデイ裔の汗を擁したチムール朝に対し、モグーリスターンにはチンギス裔の汗が立てられていない。チンギス裔の権威を重んじる遊牧民の要素が強い筈のモグーリスターンにおいて、カマルッディーンが、チンギス裔の権威に頼ることなく、自己の政権を曲がりなりにも保ち得た理由については、検討に値する課題であると思われる。

尤も、カマルッディーンの後、モグーリスターンには、再びチャガタイ裔の汗が復活した。チムール朝では、汗は全くの傀儡に過ぎなかったが、モグーリスターン汗国では、汗の権力は決して弱いものではなく、やがて、汗はドグラト氏のアミールを凌ぐ権力を振るうようになった。天山北麓の遊牧民の間には、依然、チンギス・ハンとその男系子孫を尊崇する伝統は根強かったと見るべきであろう。

ところで、モグーリスターン汗国の汗たちの系譜は、現在に至るまで、学界においてはまだ確定されていないように思われる。それは、モグーリスターン汗国の基本史料である、ムハンマド・ハイダル・ドグラトの『ラシード史（ターリーヒ・ラシーディー）』が伝える系譜情報と、チムール朝期のモンゴル王統系図『ムイッズル=アンサーブ』の記載との間に、相違があるためである。しかし、伝説的な要素が少ない『ラシード史』の史料性には問題があり、また、先行研究によって使用された『ムイッズル=アンサーブ』のパリ写本には誤写の存在が認められるので、いずれの系譜情報についても、問題がある。そこで、研究においてまだ十分には使用されていないインド系『ムイッズル=アンサーブ』諸写本の記載と、シャイバーニー朝初期に編纂されたチャガタイ=テュルク語史料『勝利の書なる選ばれたる諸史』における系譜情報をも比較・検討することによって、モグーリスターンの汗たちの系譜を復元することは可能であると思われる。

モグーリスターン汗国は、十五世紀末頃より、ウズベク、カザフ、カルマク（オイラト）など、他の遊牧集団に圧迫され、次第に勢力範囲・領域が縮小したが、東部天山地域やタリム盆

地方面に活路を見出した。東トルキスタンの最東部に位置する哈密（カムル、コムル）は、トルキスタンにおけるウイグル仏教の最後の拠点であったが、1513年、モグーリスターンの汗、マンスールの東進のため、哈密のウイグル仏教勢力は、明朝領内に後退し、伝統あるウイグル文化は壊滅的な打撃を受けた。ちなみに、仏教信仰を守り続けたウイグル人は、敦煌、肅州（酒泉）、甘洲（張掖）一帯に移り住んだようである。豊富な文書・記録を残したウイグル文字文化は清朝の康熙年間まで残存したが、その後、絶えた。現在の「裕固族」（黄ユグル人）のなかには、彼らの系統を引くものも存在している。なお、現在の新疆ウイグル自治区における人口最多の先住民族、ウイグル（維吾爾）の民族名は、ロシア革命後におけるソビエトの民族政策のもとで新たに制定された復古的新名称であり、上述の仏教徒たるウイグルから歴史的に連続して民族名を受け継いだものではないので、注意が必要である。それはともかく、結果的に、モグーリスターン汗国は、ウイグル仏教が盛んであった東トルキスタン東部におけるイスラーム化の完成に決定的な役割を果たすこととなった。そのような意味で、テュルク系のムスリムである現代ウイグル（維吾爾）「民族」社会の枠組みの原形は、モグーリスターン汗国によるタリム盆地・東部天山地域の支配のもとで形成されたと見るべきであると考えられる。そのような意味で、内陸アジア史におけるモグーリスターン汗国の存在の意義を理解することができると思われる。

モグーリスターン汗国の流れを汲み、タリム盆地を根拠地とした「カシュガル（ヤルカンド）汗国」の時代、イスラーム神秘主義教団の影響力が次第に強まり、遂にチャガタイ裔の汗に取って替わるに至ったが、ジュンガル遊牧国家の君主ガルダンは、1679年、東トルキスタン東部のハミ、トルファンを服属させ、1680年、タリム盆地方面に出兵してカシュガル、ヤルカンド等を占領し、東トルキスタン全域を属領化し、イスラーム神秘主義教団の権力を排除した。チャガタイ裔は、ジュンガルによる支配下において辛うじて残存したが、権力・権威とも既に無きに等しく、清朝による東トルキスタン征服の後、北京に入覲し、嘉慶十年まで家系が続いた後、断絶した。

『欽定續纂外藩蒙古回部王公表傳』卷之十二、表第十二  
（『國朝者獻類徵初編』卷首之百四十四「外藩初續表」）  
「一等台吉定世襲二等台吉今停襲」

初授一等台吉**哈什木**第一次降襲二等台吉**阿布勒**均見前表

一次襲

**阿布勒**

哈什木子。由哈什木之一等台吉爵降襲二等台吉。嘉慶八年卒。

二次襲

**阿克巴什**

阿布勒次子。嘉慶八年襲二等台吉。十年卒。無嗣停襲。

なお、『欽定西域同文志』卷十一「天山南路回部人名」一「青吉斯汗族屬」には、清朝に帰順したモグーリスターンのチャガタイ裔の、チンギス・ハンに始まり二十五代にわたる直系系譜情報が記載されているが、その内容には疑問点が甚だ多く、信頼できるのは「第十六世」のスルターン・ユヌス以降の部分に限られる。モグーリスターン汗国の後裔に伝えられた系譜情報が、何故、このように不適切な内容を持っているのか、解答を得るのは困難であるように思われる。

<b>cinggis han</b>	漢字	青吉斯汗		
回部之汗爲第一世。按回教相傳始墨克・墨德那諸國。今天山南路派噶木巴爾一支其的傳也。青吉斯汗族又爲舊君其國者。因首敍焉。青吉斯汗以上無考。 蒙古字 činggis qan				
	回字	jinkīs xān		
<b>cahandai mamaki</b>	漢字	察罕代瑪瑪奇		
青吉斯汗之子。爲第二世。 蒙古字 čaqandai mamaki 回字 jāxādāy māmākī				
<b>harabaisu birak</b>	漢字	哈喇拜蘇畢喇克		
察罕代瑪瑪奇之子。爲第三世。 蒙古字 qarabayisu biray 回字 xārābāy sūbī rāk				
<b>dawaci</b>	漢字	達瓦齊		
哈喇拜蘇畢喇克之子。爲第四世。 [蒙古字 dawači] [回字 dābāji]				
<b>bardang</b>	漢字	巴爾當		
達瓦齊之子。爲第五世。 蒙古字 bardang 回字 bārdānk				
<b>batur bohan</b>	漢字	巴圖爾博汗		
巴爾當之子。爲第六世。 蒙古字 baGatur buqan~buqan 回字 bātūrbū xān				
<b>tumene</b>	漢字	圖墨訥		
巴圖爾博汗之子。爲第七世。 蒙古字 tūmene 回字 tūmūn				
<b>agu:s</b>	漢字	阿古斯		
圖墨訥之子。爲第八世。 蒙古字 aγus 回字 āγūs				
<b>haidu</b>	漢字	海都		
阿古斯之子。爲第九世。 蒙古字 qayidu 回字 xāydū				
<b>sambowa</b>	漢字	薩木布瓦		

<b>海都</b> 之子。爲第十世。	蒙古字	sambu-w-a	回字	sām būā
<b>temur tuhuluk</b>	漢字	特木爾圖胡魯克		
薩木布瓦之子。爲第十一世。	蒙古字	temür tükülüg	回字	timürtü ɣlūq
<b>kedzer hojo</b>	漢字	克則爾和卓		
特木爾圖胡魯克之子。爲第十二世。按回語、和卓有道之稱。後凡言和卓者倣此。	蒙古字	kezer qojo	回字	xīzrī xūjū
<b>sirali</b>	漢字	錫喇里		
克則爾和卓之子。爲第十三世。	蒙古字	sirali	回字	šīr ‘ālī
<b>siramahamut</b>	漢字	錫喇瑪哈木特		
錫喇里之子。爲第十四世。	蒙古字	siramaqamud	回字	šīr muh.ammad
<b>mamut</b>	漢字	瑪木特		
錫喇瑪哈木特之子。爲第十五世。	[蒙古字	mamud]	[回字	māmūt]
<b>sultan yunus</b>	漢字	素勒坦玉努斯		
瑪木特之子。爲第十六世。	蒙古字	sultan yunus	回字	sult.ān yūnūs
<b>sultan amat</b>	漢字	素勒坦阿瑪特		
素勒坦玉努斯之子。爲第十七世。	蒙古字	sultan amad	回字	sult.ān ah.mad~axmad
<b>sultan saiyet</b>	漢字	素勒坦賽葉特		
素勒坦阿瑪特之子。爲第十八世。	蒙古字	sultan sayiyed	回字	sult.ān sayyid
<b>abdurisit</b>	漢字	阿布都里錫特		
素勒坦賽葉特之子。爲第十九世。	蒙古字	abdurisid	回字	‘aydū【ママ】 rašīd
<b>abdura`im</b>	漢字	阿布都喇伊木		
阿布都里錫特之子。爲第二十世。	蒙古字	abdura`im	回字	‘aydū【ママ】 rah.īm
<b>baba han</b>	漢字	巴巴汗		
阿布都喇伊木之子。爲第二十一世。	蒙古字	baba qan	回字	bābā xān

<b>akbasi</b>	漢字	阿克巴錫		
巴巴汗之子。爲第二十二世。				
	蒙古字	aqbasi	回字	aq bās
<b>sultan ahamut</b>	漢字	素勒坦阿哈木特		
阿克巴錫長子。爲第二十三世。				
	蒙古字	sultan aqamud	回字	sult.ān axmad
<b>iskender</b>	漢字	伊斯懇德爾		
阿克巴錫次子。				
	蒙古字	iskender	回字	iskandar
<b>mangsur</b>	漢字	莽蘇爾		
素勒坦阿哈木特之子。爲第二十四世。哈色木同。				
mānk sūr	蒙古字	mangsur	回字	
<b>hasem</b>	漢字	哈色木		
伊斯懇德爾之子。				
	蒙古字	qasam~qasem	回字	qāsim
<b>abdula</b>	漢字	阿布都拉		
莽蘇爾之子。爲第二十五世。				
	蒙古字	abdula	回字	‘abdū alā

## 五 氏・称号をめぐる問題

以上、モンゴル帝国西部における継承諸政権におけるチンギス裔について概観したが、貴族であるチンギス裔は、“平民”、即ち、「カラ=テリグン qara terigün」、「カラチュ[ス] qaraču[s]」、カラ=キシ qara kiši」と称される他のモンゴル=テュルク諸集団と明瞭に区別された。これは、チンギス一族と婚姻関係を結んだ姻族さえも、例外でない。

東方のモンゴル人の間では、チンギス・ハーンは神格化されているが、イスラームに入信した西方のモンゴル=テュルク系諸集団の間では、チンギス・ハーンの神格化は見られないので、チンギス裔を神の子孫とする解釈は、あたらないであろう。

私見では、チンギス一族を特別な存在たらしめている根源は、チンギス・ハンが編成した千戸制にある、と考える。

即ち、千戸制は、ウルス（くにたみ）の所有者たるチンギス一族と、チンギス一族に従属した“平民”とを差別化するものであり、チンギス一族を絶対化する装置としても機能したと考えられる。

さて、モンゴル帝国の西部を支配したチンギス一族においては、宗教的にイスラーム化、言語的にテュルク化が進行し、それと平行して、遊牧から都市での定住へと生活形態を転換する傾向も次第に見られるようになった。また、モンゴル帝国期とそれ以前において厳守されていた族外婚の制も破られ、チンギス一族同士の婚姻もごく当然のように行われるようになった。このように、西方におけるチンギス一族は大きく変質したにもかかわらず、モンゴル=テュルク系諸集団におけるチンギス裔に対する特別視は、依然として続いた。

この過程において、西方において、モンゴル王族の氏（オボグ）「キヤト=ボルジギン」は、いつしか忘れ去られた。東方のチンギス裔において、氏（オボグ）名のボルジギンが重視されたことと、対照的である。

また、モンゴル高原でチンギス裔に対して用いられる「黄金の一族（アルタン・ウルク）」という語は、イスラーム化したチンギス裔の間では使用されていないようである。トルファン（ウイグル）語文書には、「アルトゥン・ウルクラル *altun uruyları*（黄金のウルクたち）」という表現が見られるが、類似の表現は、管見の限り、ペルシア語、チャガタイ=テュルク語史料においては見られない。

西方のチンギス一族においては、彼らに対して与えられた「ケウン *kāūn*」という称号が、氏族名に代わって、チンギス一族を区別する機能を果たしていたようである。この語は、モンゴル語で「子」を意味する「コウン *kö'ün*」に他ならず、カラホト出土モンゴル語文書等には「コベグン *köbegün*」として現れるものであり、王子を意味する語として用いられたことが、既に先行研究によって指摘されている。

ハムドゥラー・ムスタウフィー・カズヴィーニー『選史』第四部第十二章「*maxlas.*」  
 (*Ta'rikh-i-Guzida by Hamdu'llāh Mustawfī-i-Qazwīnī*, vol.I, E.G.Browne(ed.), Leyden—London, 1910, p.565. 一部、他本に従って語句を改めた部分がある)

### 兄弟たちと彼らの後裔たち

#### ジュチ・カサル *jūjī qasār*

チンギス・ハン *jinkiz xān* は、彼らの後裔 (*nasl*) を尊重[した]。王子たち (*šah zādagān*) と見做して[いた]ように。今日、[人々は]彼らを「ケウン *kāūn*」と呼んでいる。

彼【カサル】には、四十[人の]子息がいた。そして、其れから、八百[人の]曾孫／孫 (*nabīra*) がいる。彼らの後裔 (*nasl*) は、[※多すぎて]数えられない。

#### ハチウン *qājīwūn*

チンギス・ハン *jinkiz xān* は、彼に対して、良き尊重[を]持った。

フビライ[・ハーン] *qubilā[y qāān]* の日々において、[人々は]彼の後裔 (*nasl*) [を]、[九百人]数えた。今日、[彼らは]数えられない[ほど多くの]数である。

#### [テムゲ・]オッチギン [*tamūka*] *ūtikīn*

年齢で、これらの人たち【他の兄弟たち】より、より少なかった。しかし、チンギス・ハン *jinkiz xān* のもとで、尊重に[おいて]、彼らよりも、より良[かった]。そして、[彼【チンギス・ハン】の御前にて]、彼らの手の上方に座った。

そして、彼には、数多くの後裔 (*nasl*) がある。

#### ベルグテイ *bīrkutay*

[ベルグテイは]他の母から[の所生]であった。

そして、彼には、ジャウト jāūtū [という]名前の一子息がいた。[ジャウトは]百[人の]妻 (zan) と百[人の]子息[を]持った。そして、[彼は]次のように、長命の、かつ、毫碌した[人]になっていた。即ち、自分の子息たちと妻たちを認識していなかった[ように]。

彼の後裔 (nasl-aš) は、数多くである。

ここでは、カサルの後裔のみが「ケウン」と称されていたように見える。これは、イル汗国の宮廷において、カサルの後裔が皇族として存在していたために、このような書き方になったものと考えられるべきであろう。

なお、『集史』「イエスゲイ・バハドル紀」第一部には、カサル裔が特別待遇されたという次のような記述がある。

そして、今日まで、慣習 (‘ādat) は、次[のとおり]であった。即ち、チンギス・ハン jīnkīz xān のウルク ūrūy (一族) は、従父たちと従兄弟たちのすべてのうち、唯一、ジュチ・カサル jūjī qasār のウルク ūrūy [のみ]を、王子たち (šah-zādagān) の列に座らせる。そして、その他の人々 (dīgarān) は、皆、アミール (部将) たち (umarā) の列に座る。

この記載を文字どおりに解釈すると、カチウン裔とテムゲ・オッチギン裔は皇族でなく部将として待遇されている、と理解せざるを得ない。しかし、この記載も、上記の『選史』の記述に倣って、イル汗国の宮廷における席次であると理解すべきであろう。そもそも、イル汗国には、カチウン裔とテムゲ・オッチギン裔の存在は知られていない。従って、この記載は、彼らとは無関係であると考えられる。但し、ベルグテイの後裔については、『五族譜』において、『集史』には見られない系譜情報があり、そこに載せられている各人は、イル汗国におけるベルグテイ裔であると思われる。おそらく、彼らは、皇族としての待遇を受けていなかったであろう。『集史』「イエスゲイ紀」の記載は、このような状況を述べたものであろう。

それはともかく、モンゴル帝国期において、チンギス一族の王子を指すのに用いられた「ケウン」即ち「コウン」という称号は、シャイバーニー朝初期のチャガタイ=テュルク語史料『勝利の書なる選ばれたる諸史 *tawārīx-i guzīda[-i] nusrat nāma*』において、ジュチの後裔たちを指す呼称として「クウンたち (kūyūn lār)」という語形で現れている (赤坂恒明 2005, 第二章第二節)。そこにおいて「クウンたち」とされた人々は、「オグラウン ūylān」の称号を帯びている。

そして、クウンたち (kūyūn lār) からは、

タングト tankqūt から、

ムラト・スーフイー・オグラウン murat (MRT) sūfī ūylān

ボアル būāl から、

シャイフ・スーフイー・オグラウン šayx sūfī ūylān

チンバイ jīmbāy から、

フサイン・オグラン husayn ūylān  
 ソンコル sūnkqār から、  
 イデル・オグラン īdil ūylān  
 ……であった。

「オグラン」という語は、テュルク語で子を意味する「オグル oγul」のペルシア語複数形に基づいているが、モンゴル帝国崩壊期以降における西方のチンギス裔がしばしば帯びる称号である。所謂「北元」のハーンとなった本雅失里は、チムールの宮廷にいたタイジ・オグラン tāyzi ūylān に比定されているが、これは、西方における称号体系に従った呼称であろう。

その頃になると、チンギス裔の員数の増大により、「オグラン」という称号の持つ貴種性が下落したと考えられる。即ち、汗の近親皇族は、十六世紀以降、新たに「スルターン sultān」の称号を採るようになり、「オグラン」よりも上位の階層であることを称号で示すようになった。称号「スルターン」が用いられるようになる現象は、ジュチの後裔と、チャガタイの後裔のいずれにおいても、ほぼ同時並行的に見られる現象であるが、管見の限り、学界において、その背景等に関する厳密な検討は、いまだに行われていない。

なお、「オグラン oγlān」という称号は、子音「γ」が脱落した「オーラン／ウラン ūlān」の語形でも、『勝利の書なる選ばれたる諸史』に現れるが、これは、ロシアやリトアニア＝ポーランドの「タタール」人におけるチンギス裔の間でも、「スルタン султан」より下位の者たちに対する称号「ウラン улан」として用いられている。

「オグラン」という称号をめぐるのは、拙稿「ジュチ・ウルス史研究の展望と課題より」（吉田順一監修、早稲田大学モンゴル研究所編『モンゴル史研究 現状と展望』、東京、明石書店、2011.6、pp.91-105）においても言及しているので、参照されたい。

“親王”に類似した概念の称号として新たに現れた「スルターン」は、クリム汗国やカザフ汗国がロシア帝国に併合された後も、両汗国の王族の後裔たるチンギス裔の貴族たちに対する称号として、引き続き用いられた。尤も、カザフにおいては、「トレ töre」という称号も現れる。また、ロシア帝政下のカザフにおける役職「上級スルタン」には、非チンギス裔の有力者も就任しており、これをチンギス裔の称号と区別する必要がある。また、クリム汗国の王族の中には、西北カフカスのチェルケス諸集団に同化してチェルケス貴族の一員となった家系もあるが、彼らにおいては、「スルタン」のほか、「ハヌク」という称号も用いられていた。称号としての「スルタン」も、地域・時代によって概念上の差異が存在する可能性が高いと思われるが、詳細はいまだ明らかでない。

### 小結 所謂「チンギス統原理」

周知のように、内陸ユーラシアの遊牧民集団の間には、チンギス・ハンの男系子孫のみがハン（君主）となることができる、という不文律があった、と言われる。

遊牧民におけるチンギス裔の権威の否定は、東方ではオイラトのエセンによって最初に実行されたが、結果的にエセンの篡奪は短期間で終わっている。しかし、モンゴル諸集団がチベット仏教に帰依したことに伴い、ダライ＝ラマの権威にチンギス裔が従うに至った。



一方、西方では、イスラームの影響力が増大するに伴い、チンギス・ハンの権威が、預言者ムハンマドの権威によって相対化され、その絶対的優位が揺らぐに至った。そして、都市等の定住社会においては、チンギス裔の権威は、比較的早く、イスラーム的な権威によって取って代われ、消滅している。しかし、イスラーム化の程度が比較的弱い草原地帯のカザフ人においては、二十世紀に至るまで、チンギス裔の権威は保たれた。

モンゴル帝国の崩壊後、内陸ユーラシアの草原の遊牧民集団における非チンギス裔の台頭は、東方のオイラト諸集団と、西方のノガイ諸集団において見られた。オイラトもノガイも、元来はチンギス裔の権威を認め、チンギス裔の汗を擁立していたが、次第にチンギス裔から離れるようになった。これは、東西における同時並行ないし雁行的な現象として、比較・検討する価値があるであろう。

また、チンギス裔の復興と急激な膨張の現象が、東方ではダヤン・ハーン裔に、西方ではカザフ王族に、やはり雁行して見られた。

中央ユーラシアの東西を俯瞰して、双方の歴史を把握することが必要であると思われる。